

「東洋と西洋の装飾論—フランスの関連シンポジウムを通じて—」

藤田 治彦

2017年2月にニース大学で国際コロク「*Ergon et Parergon* 装飾芸術、応用芸術、産業芸術」が開かれた。Carole Talon Hugon氏の司会で、ニューヨーク市大のNoël Carroll氏が構成主義、私が「東洋と西洋の美術と工芸」の基調講演を、18名が研究発表を行った。欧州に加えUAEからの発表もあり、装飾その他の諸芸術への興味は世界的に高まっている。

近代におけるエルゴン、パレルゴン論議はカントの『判断力批判』が起点で、絵画の額縁、彫刻表面の衣服、建築の列柱や柱廊を挙げ、豪華な金の額縁で額内の絵画の美を高めるだけなら虚飾で、真の美を損なうと批判した。デリダは、装飾あるいはパレルゴンは、作品（エルゴン）の傍らにあるが、外から内へと協働し、対等に働くと述べた。デリダのパレルゴン論は、装飾芸術だけでなく、芸術のあり方が大きく変わる現代アートにも関係している。

パリ第8大学のPamela Bianchi氏は「消滅の歴史：展示建築における装飾」を発表し、額縁は金色の豪華な額からシンプルな額に変わり、額なし作品も現れ、作品展示も美術館から、いわば額なしの日常空間へと変わる、歴史的变化を論じた。

ジュネーヴ大学のBrenda Lynn Edgar氏は「写真の装飾的使用」を論じた。窓などの開口部の写真は、いわば壁画に代わるガラス絵、ステンドグラスに取って代わる写真で、デッサウのグロピウス邸の大きなガラス窓に見える外部風景とミース・ファン・デル・ローエがアメリカ初の住宅プロジェクトで行った、大きな開口部から見える自然風景の設計案としての提示で結んだ。透明なガラスを通して見える風景を造形要素とするのは、川島洋一氏の「装飾と透明」に共通する視点からの報告だった。

この神戸のシンポジウムでは、ミースのそれ以前の重要作《バルセロナ・パビリオン》を例に挙げよう。建築は16世紀以来、重要な視覚芸術の一つだったが、「反装飾」の近代建築の時代に視覚性（ある意味では装飾性）をさらに強めた。ミースなど「非装飾・反装飾」の巨匠こそ装飾重視の近代建築家だったと言える。このようなミースの室内と、内から外の空間展望に先駆けたのは、書院造、数寄屋造など、日本の住宅だったとも言える。

オルセー美術館のMarine Kiesel氏は「理論家ルノワール：装飾としての絵画と壁との関係」を論じた。印象派の作品は、歴史、宗教、道徳等を主題としない純粋な絵画とみなされもするが、従来のように思想道徳等は問題にしない装飾画になったと言うこともできる。

パリ第1大学のBrice Ameille氏は「装飾が主題になる時 - 19世紀末絵画に描かれた壁紙」で、大陸にも影響を与えたモリスの壁紙を背景に描いたフランス絵画を

論じた。特にモリスの壁紙《果実》を背景にしたヴェイヤールの室内風景に注目し、壁紙が室内装飾を超えて室内環境を形成し、装飾が、絵の額縁ではなく、絵の主題になっていると指摘した。

神戸での川島氏の発表「装飾と透明」もユニークな現代装飾観で、付け加えるなら、ガラスの現代建築では「透明性」に加え「反射性」も重要だ。近現代建築は装飾を否定して成立したかのようだが、少なくともガラスの大幅な使用は非常に装飾的な建築設計とも言える。

高安啓介氏の「無装飾から超装飾へ」も、ある意味「無装飾」というのは装飾的で、「超装飾」ともいえる現代建築デザインも実は過去の装飾に匹敵するぐらい、あるいは過去の装飾的デザインを超越するほど装飾的なものかもしれないという興味深い報告だった。

玉蟲敏子氏の「かざりと装飾—日本美術からのアプローチ」は、伝統的装飾に限られていたが、その限定は重要だ。川島氏と高安氏の報告での装飾は、広義の装飾、あるいは、新たな造形ないしデザインの魅力を「装飾」という言葉で置き換えて語られているところもある。

「エルゴンとパレルゴン」の観点で比較するならば、日本の絵画に額縁はなく、仏像、菩薩像等の衣は付随的というよりも不可欠の要素ともいえる。そして、日本の建築は柱の建築で、西洋のように「周囲の柱は装飾」とはまったく言えない。このシンポジウムでは、広義の装飾論議の広さの魅力と、狭義の装飾論議の深さの魅力をともに大切にすべきだろう。

音楽で結ぼう。ニースでは論じられなかったが、西洋の「装飾音」論議では、インド音楽やケルト音楽、ジャズ、ロック、ポップ等は論じられる。神戸でも、日本の音楽についてはあまり触れられなかった。インドやケルトの音楽なら西洋の「装飾音」で語れるが、日本の音楽は十分語れないように思われる。この音楽も加えた藝関連シンポジウム「21世紀、いま装飾について考える」は世界で最初の試みであったかもしれないし、「装飾」再認識の機会であり、また西洋の「装飾」では十分語れない日本の諸芸術の特性を考えるよい機会でもあったと思う。